

〈書 評〉

ナタン・ワシュテル著『敗者の想像力』

(小池佑二訳, 岩波書店, 1984年)

I 本書の意図

16世紀に始まるヨーロッパの拡張が、文明、進歩あるいはキリスト教の名の下に常に暴力を伴って実現されてきたことは周知の歴史的事実である。スペインによるラテンアメリカの征服は、その暴力の程度あるいは暴力の正当性をめぐって評価がなされてきた。「黒い伝説」か「白い伝説」かの論争も、このレベルでの論争であった。本書は、暴力の意味を構造の問題としてわれわれの前に明らかにする。そして暴力がもたらした「文明化」とは、征服された者にとって何であったのかを問うことによって本書が論じようとしているのは、視座の転換である。それは敗者（原住民）の視点から、「征服」を再構成しようとする試みである。

本書の対象は、地域的にはインカ支配領域としてのアンデス地域、時期的には1530年の征服開始から1580年のトレド統治の終了まで、つまり政治・社会・経済にわたる広義の「征服」の完了までである。

本書による構造の分析と視座の転換という立場は方法上、次のような試みを含んでいる。口頭伝承、民俗芸能を含む土着資料の重視、民族学と歴史学の方法論的な整合性を図ること、スペイン社会と原住民社会の接触部面を文化変容の概念に基づいて類型化すること、などである。

以下では本書の概要を評者の関心に基づいて示し、本書によって触発されたいくつかの点を述べておきたい。

もとより本書の対象時期は、評者にとってほとんど未知の領域であり、本書執筆の背景、学界における位置づけ等については、本書の解説を参照していただきたい。

II 本書の構成

第一部「歴史的諸事件——征服の傷痕」第一章「神々の死」では、「征服」がもたらす未曾有の事態を前にして、その世界観の崩壊にさらされた原住民の心理的葛藤を描いている。伝説上の救世主である白い肌の神とスペイン人が同一視されたことの意味を、著者は未知なものに対する自らの思考装置への位置づけ＝合理化とみる。この合理化が限界に達したとき、精神的な傷痕が生じ、これが「神々の死」として表現される。第二章「征服の踊り」では、現在に伝わるアンデスやメキシコ、グアテマラにおける「征服」をテーマとする舞踊劇の意味を分析することにより、「征服」が原住民にいかなる形で伝承され、合理化（メシアニズムの形をとって）されてきたかを示す。

第二部では、第一章がインカ社会の構造、第二章が構造の崩壊、第三章がその結果としての文化変容を扱っており、著者の言葉によると「まったく外的な要因による事件」（2頁）によりインカ社会がいかに崩壊し、文化変容を遂げたかを、人口、経済、社会、文化の諸側面にわたって分析している。まず全体の議論の出発点として、「征服」前のインカ社会の構造・組織の編成原理を明らかにしていく。その経済構造は、農村共同体を基底として、成員間の互酬関係（相互扶助、土地の定期割替慣行等）と、インカ国家と共同体間の再分配関係が、非市場的なインカ経済の基本原則として働くとして、ワシュテルは周知のポランニーの理論のアンデス地域への適用をジョン・ムラから受け継いでいる。この互酬・再分配の経済原理と並んで、インカの社会制度は双分・三分割、および十進法による親族構造ならびに官僚制に基づく編制原理によって支配されていたとする。こうして徴税、労働力の徴集、軍隊の編成が円滑に行われたのである。

以上のような形で完結したインカ社会の崩壊過程が、第二章で分析される。人口については、その激減の原因として従来の定説である虐待・戦争・伝染病の他に、出生率の低下という仮説を提出している。これも社会構造の崩壊の結果として捉えられている。人口減少の度合に関して種々の検討を加え、結論としてインカ帝国領域の人口は、1530年頃の約800万人から1590年頃の130～150

万人へと80%の減少を示したと推定している。このような人口の激減は、十進法に基づく編制原理を分断させ、社会構造を崩壊させたのである。

第二に経済構造の崩壊は、国家—共同体関係における再分配体系の崩壊として提示されている。スペイン人支配により何ら反対給付を伴わない貢納関係がエンコミエンダをつうじて実施された。これを再分配に代わる搾取関係として捉えている。この搾取関係は、納税の金納化→賃労働部門への出稼ぎ→共有地の放棄→スペイン人への土地集中という一連の過程により、原住民のプロレタリア化を促進していったとする。

社会構造の崩壊については次のようにみている。共同体経済の崩壊の結果、共同体首長（クラカ）と共同体成員間の互酬関係が弱まり、クラカはスペイン人支配の手先となる一方、共同体から逃亡する原住民が激増し、彼らはスペイン人所有の農園、鉱山などに働くヤナに転化していく。こうして植民地社会は、スペイン人に直接従属する原住民（『放浪プロレタリアート』）とクラカを通して間接的に搾取される原住民（『定住プロレタリアート』）の二極に分化し、「土着の社会構造は崩壊した」（207頁）と結論づける。

第三章の「伝統と文化変容」では、人種混交、食習慣、服装、言語、宗教、世界観に関して、ヨーロッパ文化が土着文化にいかなる変容をもたらしたかを検証している。著者の分析をみると、領域・階層・地域によって偏差は認めているものの、基本的には伝統の力が強く、部分的な受容しか起らなかったと判断している。この態度はとくに宗教などの精神文化の面において顕著であり、「キリスト教とアンデスの宗教は共存していたにもかかわらず、新たな総合を生み出すことがなかった。このふたつは、融合というよりも並置されただけであった」（236頁）と述べている。そして、原住民がメスティソを畏怖し、嫌悪するのは、スペイン文化への同化の拒否の態度と同根であることを示唆している。

ここで著者は原住民の思想を代表するガルシラソ・デ・ラ・ベガとグアマン・ポマ・デ・アヤラの二人の著作を対比する。前者の歴史解釈は、人類史のなかにインカ帝国を位置づけ、植民地ペルーの苦悩をキリスト教的な神の摂理と

とらえ、過去のインカ帝国を美化し、理想化する。後者は伝統的な世界観に基づいて世界地図を構想する。著者はその世界観を検討して、ボマの考えは植民地世界を土着の空間・時間的体系のなかでとらえ、原初の状態への復帰を正当とし、植民地支配の転覆、反乱への道に通ずると結論した。この点、ガルシランがヨーロッパの概念に基づいてインカ国家を位置づけたのに対し、ボマが伝統的思考によって世界を再構成したことに両者の対照性をみている。本書の立論において、ボマの土着の方法による世界解釈の方が重要であり、はるかに多くの紙数がある分析に充てられている。

著者は前二者の問題意識を、構造の解体を前にしてありうべき世界像を描いた点に求め、イデオロギー上の反乱をとらえた。そして第三部では、集団による実際の反乱を分析の俎上にのせる。著者は文化変容との関連において反乱の類型化を試みる。そこで社会的危機の表現としての千年王国運動が文化変容を拒絶するところで起こること、あるいは武器や戦略など反乱を持続する限りにおいて文化変容を受け入れるという指摘がなされている〔「文化変容は反乱を助ける道具となっている」(298頁)〕。さらに辺境地帯における原住民の反乱、抵抗にも言及し、チチメカ族やアラウカノ族はむしろ乗馬術や武器の改良など積極的な外来文化を受け入れ、スペイン支配に抵抗し、一定の成功を勝得たとしている。

「結論」において著者は、西欧文化への全面的な同化に抵抗する土着文化の根強さを強調し、「はたしてほんとうに彼らは征服された人々なのだろうか」(330頁)と自問する。彼はその答えを伝統がもつ再生力のなかにみいだすのである。

Ⅲ 本書の問題点

本書の構成を著者は第Ⅰ部—出来事、第Ⅱ部—構造、第Ⅲ部—実践として要約している。Ⅰ部、Ⅱ部と読み進んでいくと、Ⅲ部に物たりなさを感じる。つまり原住民反乱を文化変容の概念によって類型化していくという新しい分析視角をもちこんでいるものの、分析自体は十分成功しているとはいえない。た

たとえば、文化変容が進んでいとされるチチメカ族（によるチチメカ戦争）と「文化変容にはげしく反対し、千年王国運動によって鼓舞された武装反乱」（296頁）であるミシュトン戦争というように対照的にとらえられた両者が、「実は……つながりがあった」（301頁）というような論理的な齟齬を生んでいる。メキシコの社会は本書ではほとんど分析されていないが、反乱の類型化も第Ⅱ部で展開された構造分析の帰結としてなされるべきであり、この点Ⅱ部とⅢ部の論理的なつながりが希薄であるように思われる。

著者の構造分析はポランニー派の理論に従って、互酬・再分配に基づく非市場経済から市場経済への移行を原住民社会の構造の崩壊過程としてきわめて明解に捉えたが、この移行過程における共同体の役割と機能の位置づけが不十分である。成員のヤナ化・プロレタリア化として、共同体の一時的な崩壊過程が描かれている。「貨幣の導入は……ただインディオ経済を否定し、破壊する役割を果たしただけである」（184頁）。しかし、このような立論からは、今日にまで至る共同体存続の秘密を説明できない。本書の書評において（*HAHR*, No. 2, May-1975, pp. 345-47）、シントゥロンはインカのシステムに関しては分析的であるが、スペインのシステムについては記述的であるとして、「双方のシステムへの構造的アプローチが、ワシュテルの分析にいつそうの深みを与えるだろう」（p. 347）と指摘している。本書は広義の「征服」を文化変容の概念に基づいて原住民生活の社会的・精神的な変容を類型化しようと試みたが、この変容の過程は経済構造においても一元的ではありえない。この点では、ラテンアメリカ経済史学における従属論から節合論への理論的発展のなかで提起されてきた「複数の異なる生産様式間の節合」概念が有効性をもっている。こうして始めて著者の言う征服の暴力性が明らかにされるであろう。著者は物理的な暴力のみならず、「エスパニャ人は、外から、まったく未知の文化（キリスト教、市場経済等）を持つ社会集団として、アンデス社会のうえに荒々しく君臨した」（137頁）点に「征服」の暴力性を認めた。こうした「日常化した暴力」（136頁）の意味は、物理的な暴力の役割をも含めて、生産力の発展格差に規定された異なる構造間の節合、変容の相互作用の分析によって解明されていく必

要があろう。

本書は「解説」にもある通り、ヨーロッパ中心主義への反省から、「征服」史を征服された側の視点から照射していくという50年代以降の新しい史観を共有している。周辺の視座からの全体へのアプローチという意味では、60年代における従属論的アプローチとはその背景および視点において軌を一にしている。従属論の分析が近・現代に傾き、原住民社会および植民地期の研究に大きな欠落があるため、著者の言う「歴史学と民族学の相互補完性」という意味では、本書が示す方法論によってラテンアメリカの新しい歴史像が構築される可能性があるといえよう。

最後に訳語について一つ気になる点は、エスパニャ人、エスパニャ語という表記である。もし原音主義を押し通すということなら、メキシコはメヒコとすべきであろう。ともかく、本書は「征服」による暴力とその傷痕を構造破壊の全体像のなかで提示しており、ラテンアメリカ研究にとっての不可欠の認識をわれわれに与えてくれる。

辻 豊治 (京都外国語大学)